

アジア世界史学会（AAWH）第3回大会参加記

大西 信行 (地理歴史科)

次ページ以下の文章は、2015年5月29日から31日にかけてシンガポールの南洋理工大學 (Nanyang Technological University)で行なわれた、アジア世界史学会 (The Asian Association of World Historians) の第3回大会において、筆者が英語で報告した内容の日本語要旨である。原報告の全文は大阪大学歴史教育研究会の報告書¹に収録されている。

AAWH²は2009年5月に設立され、近年盛んになって多くの成果を上げている、ヒトやモノの移動あるいは環境・情報・疫病などを手掛かりに広い地域のつながりや長い時代の大まかな変化を扱う、いわゆるグローバルヒストリーをアジアの視点から考察するための国際学会である。大会は3年に一度行なわれ、第1回は日本（大阪大学）で、第2回はソウル（梨花女子大学）で行われた。筆者はそのいずれにも報告者もしくはコメンテーターとして参加した。一昨年の第3回大会³も、千葉経済大学の川戸貴史氏を中心とするパネル、“Migration, Trade and Exchange around the Peripheral East Asia”のパネリストとして参加することができた。このパネルは、日本中世の銭貨流通に関する研究の今日における第一人者である川戸氏を中心として、北海道における一括出土銭の分析やアイヌ文化・社会の研究を精力的に進めている中村和之氏（国立函館工業高等専門学校）、勤務校の学校設定科目を通じて、「日本史」や「世界史」の枠組みを超えた歴史教育コンテンツをすさまじい勢いで開発している横井成行氏（海城中学・高等学校）をパネリストとし、日明関係史の専門家であるオラー・チャバ氏（国際基督教大学）を司会として進められた。

この学会へ参加する機会を与えてくださった中央大学杉並高校と多くの援助

してくださった大阪大学歴史教育研究会の関係者のみなさまに厚く御礼申し上げます。

註

- 1 『大阪大学歴史教育研究会 成果報告書シリーズ13 ——第3回AAWH（アジア世界史学会）報告集——』（研究者・教員・市民のための新しい歴史学入門 平成26-29年度科学研究費補助金・基盤研究(A)・課題番号26244034 報告書）、2016年3月
- 2 AAWHに関する概略は現在同学会の会長を務める大阪大学の秋田茂氏が高校教員向けに書いた帝国書院編『高等学校 世界史のしおり』2012年度3学期号を参照されたい。下のURLからPDFのダウンロードが可能。
https://www.teikokushoin.co.jp/journals/history_world/pdf/201301/07_hswwhbl_2013_01_p10_11.pdf
- 3 AAWH第3回大会のプログラムに関しては、以下のURLを参照されたい。
http://www.thearwh.org/data/aawh_booklet_0509.pdf

AAWH第3回大会報告日本語要旨

16世紀の東アジアにおける日本銀流通と朝鮮王朝の官僚制

はじめに

この報告の目的は、16世紀に中国大陸を中心とする東アジア各地において大きな経済的インパクトをもたらした日本産の銀の流通が、日本を含む他のアジア各地と同様に、朝鮮王朝内部の党派抗争と深い関連を持ったことを示すこと、そしてその事実が、日本の歴史教育では明確に分断されている「世界史」と「日本史」をつなぎ、日本の歴史教育をより豊かに、そして面白くする可能性があることもあわせて指摘することである。

1. 日本の歴史教育の現状 ～「世界史」と「日本史」～

私は日本の高等学校で歴史を教えている。本題である朝鮮半島における日本銀の流通を説明する前に、日本の高等学校における歴史教育について簡単に説明しておきたい。そのことが、このテーマに私が興味を持った理由を説明することにもなるだろう。

日本の高等学校では、歴史は「地理歴史」という教科にまとめられ、それは、「世界史A/B」と「日本史A/B」「地理A/B」という六つの科目に分けて教えられている。それぞれの「A」と「B」の違いは、この報告の内容には直接関わらないので、ここではこれ以上深入りしない。また、地理に関してもひとまずは置いておく。ここでは、「日本史」と「世界史」の関係について議論を進めてゆきたい。

日本史では、「国民国家日本」の形成過程を、主に国内の要因に焦点を当てて説明している。そのため、外国との関係は、戦争や交易など直接的な関係については説明される。その一方で、日本の置かれた国際環境や周辺諸国からの影響、あるいは諸現象の共時性などには従来からあまり注意を払ってこなかった。

一方で、「世界史」とは、戦前の中等教育の科目であった「西洋史」と「東洋史」をあわせて成立したもので、世界とりわけ東洋の一部であるはずの日本の歴史に関する内容は慎重に排除されてきた。さきに説明した「日本史」と内容が重複することを防ぐためである。

また、学習活動に関しては、大学入試で事件名や人物名が細かく問われることが多いことから、それらを正確に記憶することが重視される。そして、ほとんどの大学では受験生は世界史もしくは日本史のいずれか一方のみを選択し、些細な事実を暗記しなければならない。その結果、ほとんどの高校生は、生徒は日本史・世界史の双方を深く学ぶ機会はなく、また、「日本史」と「世界史」を全く別のものとして捉え、相互の関連をあまり想像しない傾向がある。このことが日本とアジア諸国の関わりを理解するための障害になることについては、改めて指摘をする必要はないだろう。

本報告の題材である16世紀のアジアにおける日本銀の流通は、そのような現状を変えるための一つの素材となると考えている。

2. 朝鮮王朝の銀に関する政策と朝鮮半島における銀採掘

朝鮮王朝では、明王朝からたびたび金銀の貢納を要求されたことに苦しみ、その免除を訴えて認められたという経緯がある。そのため、たとえ朝鮮半島で銀を産出するとしても、そのことは明に対して秘匿しておく必要があった。さらには、朝鮮王朝では銀を通貨として使用することは厳しく禁止され、死刑を含む刑罰が科されていた。それが転換する契機は日本軍が朝鮮半島に侵略してきたときに援軍としてやっきた明が大量の銀を使ったことであると、一般には考えられてきた。その根拠は、19世紀初頭の官撰書である『万機要覧』である。

しかし、その銀の流通・使用が厳しく制限されていた時期に、朝鮮では銀鉱山の採掘が行われていた。

西暦1503年、朝鮮咸興道のやや北よりに位置する端川郡で、銀鉱石から銀を精錬する方法の一つである、灰吹法による銀の生産がはじまったのである。

その2年後に当時の国王であった燕山君はクーデタによって位を追われ、代わって中宗が即位した。彼は前国王時代に乱れたとされる綱紀を正すことに力を入れた。銀が明から贅沢品を入手するための密貿易の原資として明へ流れていることを問題視したのである。それは明が金銀を貢納する命令を復活するのではないかと恐れたからであった。その後も、端川での銀採掘の問題は長い期間にわたって議論され、縮小と再開を繰り返した。しかし、ついに西暦1533年に、採掘を中止することが命令された。これらの経緯は、朝鮮王朝の公式記録である、『朝鮮王朝実録』に記録されている。

大きなリスクを負っても、朝鮮王朝が銀の採掘を続けた理由を二つ挙げることができる。

一つは貂皮交易で繁栄しつつあった女真との境界領域にあたる咸興道で、彼

らとの軍事的緊張に備えるための軍資金が不足していたことである。そしてもう一つは、唐物を珍重する風潮が広まっていたことである。朝鮮において、14世紀の末頃から農業技術が発達して全国的な規模の流通網が整い、地方における定期市が発展した結果、贅沢品の需要は都の漢城だけではなく全土に及んだことが明らかになっている。

このようにして、朝鮮における銀採掘とその頃の社会の変化は、日本からの銀を受け入れる条件を形作っていたのである。

3. 灰吹法の日本への伝播と朝鮮半島への銀の流入

日本列島で、最初に銀が大規模に採掘されたのは、現在の島根県にある石見銀山である。その石見銀山の発見・開発の経緯を記した『銀山旧記』によれば、ある博多の商人が石見国において銀鉱脈の存在に気づいたのが、西暦1526年であり、その7年後には、朝鮮から2人の技術者を連れてきて精錬を開始し、銀の大量採掘・生産が始まった。朝鮮半島には、その直後から銀が持ち込まれていたことについては、『朝鮮王朝実録』の「倭銀」に関する記事が見つかる時期と一致するので、事実と考えられる。先にも述べたように、16世紀末までの朝鮮半島では銀の流通・使用は厳しく規制されていたにもかかわらず、朝鮮半島に流入するのである。その理由について、韓国の研究者は、日明間の公式な貿易、いわゆる朝貢貿易が断絶したためと考えた。しかし、その推論はあまり説得力を持たない。なぜなら、その頃はすでに後倭寇（「倭寇」とよばれているが、実際には日本人に限らない、国境や民族を超越した雑多な人間集団である）の活動は活発化しており、また、断絶前の公式な貿易もあまり頻繁ではなかったので、その断絶が日明間の貿易全体にしめるインパクトは決して大きくないと考えられるからである。また、『朝鮮王朝実録』には、倭寇と関係あるとみられる人々が、朝鮮半島で日本銀を買い戻し、それを中国大陸に持ち込んでいるという記事も見いだすことができる。中国では税制の転換と西北辺境での軍事費をまかなうために、銀の需要が高まっていたためである。日本

銀の最大の行き先は中国大陸である。

だとすれば、朝鮮から技術が伝わって日本銀の増産が実現し、それが朝鮮半島に流れ込んだ理由は、朝鮮半島の状況に求めなければならない。そしてそれは、表向きの禁令にかかわらず、支配層に止まらず、庶民にいたるまで華美な絹織物などの中国産品を求める風潮だと推測するのが自然であろう。

中国産の絹織物の使用を巡る議論をつぶさに見ていくと、使用を制限することは仕方ないとしても朝廷の儀式の際に着用する絹織物に関しては制限をゆるめるべきだとする議論と、それらに対して厳格な制限を求める議論に大きく別れることに気づく。前者は主に議政府という、今日の内閣にあたる部局の官僚たちが主張し、後者の主張は、司憲府など、おもに役人の不正を監視・糾弾する機関の官僚によってなされた。

日本産の銀が朝鮮半島へ流れ込むようになって10年ほど経った西暦1542年、日本国王の使者と称する安心という僧侶が銀8万両（800貫、約3トン）その他の貨物をもって、朝鮮に来航し、木綿布との交換を求めた。当時、日本国内では木綿の生産は広がっていなかった。そこで、安心の一行は大量の石見銀と木綿の交換を求めたのであろう。しかし、彼らは正式な日本国王の使者ではなく、おそらくは対馬で仕立てられた偽の使者であることが、これまでの研究で明らかになっている。そのうえ朝鮮王朝では、木綿布は納税手段つまり一種の通貨としての機能を持っているため、簡単に彼らの要求に応じるわけにはいかなかったのである。

安心の要求に対してどのように対応するかをめぐって、やはり、朝鮮王朝内部の議論は、議政府およびそこに属する機関と、司憲府や司諫院（政治の誤りを国王に対して直接諫言するための機関）などの機関で完全に対立したのである。前者は、隣国との友好の見地から、官庁や地方の役所が蓄えている木綿でできるだけ銀を買い取り、残りを民間に買い取らせることを主張した。それに対して後者は、銀を直接衣食に用いることはできないこと、今回買取に応じれば今後はより多くの銀を持ってくるであろうこと、銀の使用を制限する法令と

齟齬をきたすこと、の3点を理由に交易の不可を主張した。

両者の板挟みにあった国王は3分の2を官と民間に分けて買い取るという両者の中間的な結論を、このときは出すのだが、そもそも、この対立の背景はどのようなものなのだろうか。

前者のグループ、つまり銀の受け取りに賛成したのは、朝鮮王朝の創設に尽力した功臣の家系に連なり、大土地所有を経済的基盤とする門閥官僚たちであった。それに対して後者のグループ、つまり銀の受け取りに反対をしたのは、儒学を修めて台頭し、郷村社会秩序の再建につとめた中小地主層たちの官僚であった。両者のグループはことあるごとに激しく対立し、なお、政府中枢にあった前者は、後者を激しく弾圧したのである。このように、日本銀は、朝鮮国内の党派抗争と深くリンクしていきながら、朝鮮半島にも及ぶのである。

むすび

対象となる地理的範囲が広い「世界史」では、国内の政争や社会内部の矛盾などを詳しく扱える機会は決して多くない。それに対して、対象地域があらかじめ決まっている「日本史」では、一次史料が世界の他の地域に比べて残っていることもあって、国内の政争や社会の内部構造などを生徒たちはかなり詳細に学ばなければならない。その一方で地域の枠の外のことはほとんど切り落とされることや、「日本は孤立した《島国》である」という固定観念のため、日本列島の周囲の状況には無関心になりがちである。そして、多くの高校生は現状では両者のどちらかのみを深く学習するため、統一的な歴史的視野を得られる機会がなかなか得がたいのである。また、大学入試では、大学で歴史の専門的な教育を受けた教員にとっても細かい内容が出題されることがある。そのことも、時間的・地理的に大局的な視野を養うことを難しくしている。

このような歴史教育の状況は決して望ましいものではないであろう。今回の発表は、高等学校の「世界史」と「日本史」の現在の関係を変えられる可能性があると考えている。今後もこのような事例を集めていきたいと考えている。